

●第一節 はじめに

宗教として浄土教を捉えるとき、あるところに絶対性を求めなければならない。仏教としては仏陀であり、その教えである経典であるが、法然とその門下の時代は、凡夫往生を認め善導の著作も絶対的な価値を持った。法然も経典ではなく善導の釈した書によって宗教的な回心えしんを体得したことに、その特殊性が認められる。これによって日本の浄土教は善導の釈えしんに基づいてその教義を発展させていった。ところで善導の経典解釈の根拠はどこにあったのであるか。善導の論点、思想背景については、石井教道博士が『選擇集全講』(三一―二頁)に指摘しているとおり、当時の撰論学派との対立から形成されてきたものであることも事実であろう。しかし、その論拠については決して明確なものとは言えず、善導自身の信仰体験を通じて開示されたものがほとんどであるとも考えられる。したがって後世に解釈の余地を残していることも事実である。

ここでは、本論の前提として取り上げることから簡単に『観経疏』散善義かんぎんしゆ さんぜんぎ(『浄土宗選書観経疏』八五―九五頁、以下同じ)の三心釈を中心に概観するにとどめることとしたい。